
IB -インフィニット・バカトリオ- [無限の3バカ烈伝]

暮灘雪夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IB - インフィニット・バカトリオ - 「無限の3バカ烈伝」

【Nコード】

N1514Y

【作者名】

暮灘雪夜

【あらすじ】

今日も激しい女尊男卑が吹き荒れるIS世界…

しかし、そんな風潮どこ吹く風と、お気楽に過ごす者達がいたっ！！

人はその者達を【バカ】と呼んだっ！！

この物語は…

バカ故に世間の風潮を良しとせず…

バカ故に世界に風穴を開けた者達の…

血と汗と涙と戦いの記録であるっ！！

お約束ですが、嘘です（――）

え〜、実はこのシリーズ、暮灘が現在休載中（泣）の【バカと努力っ娘と四角形】という作品を現役で書いてる頃から大変お世話になってる、【なるろう】バカテス二次創作の大御所の御一人、ヒョウガ先生との連動企画だったりします（；^ー^A

いや〜、ヒョウガ先生が「ISでコラボ書く」と言いなはるんで、暮灘も便乗させてもらうたんですわ

中身はタイトル通り、【IS】と【バカとテストと召喚獣】のコラボ・ギャグとなったりします

あっ、そういえば…

【バカテス・キャラ】

【IS世界】

という構造なので、基本的にISの二次創作でバカテスキャラは少数登場(予定)ですよ。

こんな話ですが、どうかよろしくお願いしますm()m

【Episode 00】第1話 "バカがロケットでやってくる!"

皆様、初めまして(――)

ようこそ【IS×バカテス】という変則しすぎて寧ろ気持ちよくな
っちゃったカオティックな世界へ

変則と変態を書くのが大好きな暮灘ですm(――)m

さてさて、早速記念すべき第1話の内容は…

さっそく、メイン・ヒロイン(?!?)の登場です

いや、この表現が正しいのかかなり謎ですが(笑)

そして、”彼女(?)”の回想から語られる悲しい過去とは…?

様々な伏線と重要情報を無理矢理押し込み、いよいよ第1話スタートです

【Episode 00】第1話 " バカがロケットでやってくる!"

それは春…

全ての始まりの時期…

美しい桜が街を彩り、全てが輝いて見える季節…

そして、そんな穏やかな陽光が降り注ぐ空を切り裂くように飛んでくるのは…

くるのは…

【巨大ニンジン】っ!?

6

”ひゅるるる〜〜……”

ちゅどおおおおーっん!!”

ニンジン(?)は、弾道飛行を描きながら、人気のない…とは言えない公園に”着弾”した…

そして…

”ばがんっ!!”

どうやら、全金属製のニンジン…呼称は”メタル・ニンジン”にしよう。

何やら、ニンジンを題材にした童謡のMetal Versionっぽいのが、細かい事は気にしてはいけない。

とにかく、中から蹴り飛ばされるような勢いでメタル・ニンジンの一部が開いた。

どうやらハッチになっていたそこから現れたのは…

「イテテ…【お姉ちゃん】も【束ちゃん】も酷いや。まさか大洋間弾道飛行で日本に戻ってくるとは思わなかったよ…」

クリクリとどこか小動物を思わせる大きなハーベスト・ブラウンの瞳…

チェリー・ピンクの唇…

真っ白なりボンを不思議の国のアリスっぽく結び目が上に来るように巻かれた、サラサラのハニー・ブロンドのロングヘア…

メタル・ニンジンから現れたのは…
スコティッシュ・キルト・チェック柄のミニスカートとエンブレム入りのブレザーがよく似合う、

【問答無用の美少女!!】

だった

ただし、生物学的な区分は、

” 謎（笑） ”

であったが…

明久 side -

皆様、はじめまして

ボク、” 吉井明久 ”よしい・あきひな って言います

あれ？

なんかアチコチで誰かがズッコケた気が…

あつ、いきなりアメリカからロケット・ニンジンで弾道飛行で飛んできて、防空迎撃網を交い潜りながら密入国（？）するなんて、非常識な上に派手な登場してすみません（汗）

それに国防軍並びに戦略自衛隊の皆さん、面子潰してごめんなさい

(――)

で、でもスクランブルで飛んできたF-22CJを4機瞬殺したのは、ボクの意思じゃなくて、ロケット・エンジンの自動迎撃システムだからね？

だからって200発以上ミサイル飛ばしてくるのは、やり過ぎかなあゝつとはやり過ぎだと思っけど…

(だから、ボクもつい本気で迎撃しちゃった訳で)

でも、本当に納税者の皆さんは今頃泣いてるんじゃないかな？

ミサイルも戦闘機も高いのに…

(でも、驚いたなあゝ)

見かけはかなりアレだけど、このロケット・エンジンって大気圏内でアニメ”マクロス・プラス”に出てくる【ゴーストX-9】みたいな性能があるとは思わなかったよ。

(さすが、東ちゃんが『自信作だびよん』って言ってただけの事はあるよあゝ)

でもさでもさ、お姉ちゃんも東ちゃんも…

『アキちゃん。最近は航空運賃も燃料サーチャージ料もバカにできません』

『アキちゃんは、私とあーちゃんの可愛い可愛いモルモット（実験動物）、というかハムスター（愛玩動物）なんだから大人しく乗っ
てくれないと駄目だぴょん』

ってロケット・ニンジンに押し込んで、リニア・カタパルトから射
出するんだもん！
酷いや！

えっ？

状況は分かったから経緯を話せ？

うん…

どっから話そうか？

取り敢えず、ボクがアメリカにいた理由から話そうかな？

そう、あれは小学校を卒業したばかりの頃だから、もう3年前にな
るかな…

かいそうっ！

3年前：

” The Day of Destiny (D・Day：運命の日)
”

11

ボクはアメリカで研究職に就いてる筈の姉さんから送られて来た
手紙(？)” に固まっていた…

正確には、A4サイズの国際郵便封筒に入っていたのは…

【来なさい】

と大きく書かれた一枚の写真だった。

固まる理由は、シンプルな文面じゃなくてむしろ写真…

【裸白衣で寝転んで、脚の間を人差し指と中指を”くぱあ”と広げるカメラ目線の姉さん】

だった。

当然のように、無修正だ…

勿論、ボクは何度も目をこすって確認し直したけど、現実は何も変わらなくて…

他にも情報がないかって写真を裏返してみると…

ありました（汗）

アキくんへ

アキくん、お元気ですか？

姉さんも写真で見るとおり肌の色艶も良く、とても元気にしています。

(姉さん、多分頭の中は元気じゃないと思うんだ…)

実は今、姉さんは親友のウサギさんと共同研究をしています。

アキくんは確かゲームが好きで、得意でしたよね？

今、姉さんとウサギさんが開発してるのも、ウサギさんに言わせれば、

『ゲームをリアルにダウンロードしたみたいな、究極の体感ゲームみたいなもんだぴょん』

という事なので、是非ともアキくんにもテスト・プレイヤーとして参加して欲しいのです。

13

(ウサギが開発したゲームって一体…?)

もし、来てくれないのなら…

姉さんは寂しくて悲しくて、思わず手が滑って送って写真の画像データをアキくんの関係先全てに、【弟に調教され性的な奴隷になった哀れな姉、吉井怜です】というタイトルを付けて携帯と言わずパソコンと言わず無差別送信してしまいそうです。

「姉さん、すぐに行くからねっ!! (泣)」

再起動を果たしたボクは気がつくともう叫んでいた!

「で、でも姉さんって今どこにいるんだろ…?」

一昨年くらいまではマサチューセッツにいたはずだけど、そこから先は聞いて無かったし…

というか、この封筒って差出人も書いて無ければ、切手さえ貼ってないんだけど…?

(どうやって届いたんだろ?)

僕がアタフタしていると、何故か玄関先で僕が手紙を読むのを待っていてくれた親切な郵便屋さんが、何か兎型の手の平サイズの機械を出してポチツとな?

『やつほー アキちゃん元気かなあ? この束さんの美声を聞いてるって事は元気だね? そうに決まった』

聞き覚えのない声が機械から流れてくる。

「えっと…ICレコーダー？」

コクリと頷く大柄な郵便屋さん。

『唐突だけど、このメッセージを聞いた後、目の前のポストマンが正体見せるからそれに乗っておいで』 あっ、それとこのレコーダーは情報漏洩防止の為にメッセージ再生終了後に自動的に消去されるから 半径5mは跡形も無く吹き飛ばよっ！ じゃあ、爆発10秒前』

「うわぁーっ！？ 早くそれを捨てて！！」

すると郵便さんはオーバースローでぎゅん！って投げた。

スツゴくいい肩してるなあ。

なんか遠くで『おしおきだべ〜！』的なドクロ型のキノコ雲が上がってる気がするけど…

（気にしたら負けだね？ きつと…）

それよりも、

「君が変形するって、どゆこと？」

ボクがそう言うなり、

”バリバリッ！”

って郵便屋さんの衣装が裂けて、中から出てきたのは…

「へっ？ ロボット…？ 君、ロボットだったの？」

コクンと再び頷く郵便屋さん。

道理で身長が3mくらいあって、手とか顔とかメカニックでメタリックだと思ったよ〜

”がこおん”

すると、そのロボットさんの内部が開いて一部が変形。ちょうどボクがスッポリ入れるぐらいのスペースができた。

いや、乗り込むというより、

(むしろ、装着するって感じかな？)

ボクは姉さんが法律的にギリギリアウトっぽい画像をばら蒔くの
阻止すべく、考える前に飛び乗った！

考える前にまず動け！

ねだるな勝ち取れ！

の精神だよ。

ボクが乗り込んだ途端にかかるフワリとした浮遊感…

あつ、なんか気持ちいいかも…

だから、ボクは叫ぶ！

「あい・きゃん・ふらぁーい！！！」

この日、ボクは生まれて始めて音速を突破した…

途中、何処からか

『ハアハア…可愛い男の娘…ハアハア…可愛い男の娘を抱っこ…私、絶対にISの中で勝ち組ですう〜』

って声が聞こえた気がしたけど…

空耳だよな？

以上、回想終了

多分、アメリカへ着いたボクは姉さんと、信じられないことにあの姉さんが親友と言いつつ切ったメタル・ウサミミのお姉さんと知り合っ
た。

『私の事は束ちゃんでもいいよ』

『では、私の事は”お姉ちゃん（永遠の17歳）”で』

『なんで姉さんまで呼び方変えなきゃいけないのっ!?!?』

『呼んでくれないなら、あの写真を...』

『OK。束ちゃんにお姉ちゃんだね?』

えっ？

何処に行くのだった？

”藍越学園”って高校の入試だよ？

それじゃあ、行ってきまあす

この時のボクは、まだ知らなかったんだ。

ボクにあんな出会いと運命が待ってたなんて…

【Episode 00】第1話 "バカがロケットでやってくる!"

皆様、ご愛読ありがとうございますm(_____)m

この物語は、あくまでギャグです

そして、連動企画&コラボという…カオスなストーリーになっております(^^);

いや、正直に言えばバカテス・キャラを描くのが久しぶり過ぎて、あの世界の雰囲気を手くたせたか、あるいはISの世界観と上手くミックスできたか激しく不安ですが、もし読んでくださった皆様面白いと思って頂けるなら、不定期&短期連載になりますが、描いていこうかなあ〜と思ってます(o^_^)(b

それでは、また次回があることを願いつつ(_____)

【Episode00】第2話 "夫を舞うのはゲッターなれど、バ

皆様、本日二度目のこんばんわー

深夜アップになりましたが、めげてはいない暮灘です(^^)；

なんと、第1話をアップしてから書き始め、完成してしまった第2話です(o^_^')b

不定期更新とは、早まる場合もあるって事で…ってこのネタ、前にもやりましたっけ?(^^)；

いつまでも、あると思うなネタと勢い！

というのが身に染みてる暮灘だけに、執筆を優先してしまいました。感想を書いて頂いた皆様、暮灘の他の作品をお待ちの皆様、エゴ丸出しなのはわかっていますがお容赦を(――)

さて、今回のエピソードは…

バカテスから美少女キャラ(?)っぱいのが二人出演します。

一人は変化球で、もう一人は…ボーク?(^^)；

ともかくにも、またまた伏線とネタを満載した…というよりサブ
タイからしてネタな第2話、お楽しみいただければ幸いです(o^
,) b

アキちゃん
明久 side -

って絶対に（ ）の中の注釈は要らないよねっ!？

いや、それはともかく…

ボクが離れた途端、メタル・ニンジンは変形を始めて…

『『ゲッター・ブレイク!』『』』

そして三分割しながら飛んで空中で合体すると、

『チェーンジ・ドラゴン! スイッチ・オン!』『』

全長50m位のトマホーク投げたり額からビームを撃ちそうなか”になつてました(汗)

(束ちゃん、スパロボとか好きだもんなあ…)

毎度の事だけど…

(エネルギー保存の法則とか質量保存の法則や慣性の法則とかって、どうなってるんだろ…?)

いや、そういうのを無視するのが、束ちゃんやお姉ちゃんだって分かってはいるけどさ…

ボクがそんな事を考えてると、え〜と…

【三位一体の合体ロボ的な何か】

は、追いかけてきた【何処かで見覚えのある真っ赤な丸模様】を描いた戦闘機とか戦闘ヘリ相手に無双してたりして…

(ボク、知〜らない!)

取り敢えずこれ以上関わったらいけない気がしたボクは…

『チェンジ・ライ ー! スイッチ・オン!』

そのまま後退りして逃走しました(汗)

『音速を超える戦いを魅せてあげましょう…マツハ・スペシャル!』

超音速で戦車隊を蹴散らす音を、背中に聞きながら…

「ね、ねえ、”ミスキ”」

ボクが呼び掛けると、

『はい　アキちゃん、なんででしょう？』

と、首に巻いたチョーカー（首輪）、正確にはそこに下がってる”ド派手なデザインのクロス”から返事が帰ってきた。

え〜と、正式には【量子演算式光バイオニューロチップ型能動的制御多目的汎用サポート疑似人格システム】だったっけ？

東ちゃん曰く

「ガンダム00のハロ、FSSのファティマ、ナイ　ライダーのナイト2000みたいなものよ」

って言ってたけど…

（例えの年代がバラバラだよな？）

束ちゃんって本当は何歳なんだろう？

(ま、まあどうでもいいかっ！ うん！)

なんか背中に氷柱を入れられたような寒気を感じたボクは、慌てて思考を切り替えた。

「あのままにして…だ、大丈夫かな？」

明日には日本って国が歴史用語になってたりしないよね？ (汗)

『大丈夫ですよ〜 シャロンさんは優しい人ですから 不思議と死人は出ない筈ですよ？ 多分ですけど』

「今、”不思議&筈&多分”って言ったよねっ！？ それ、スツゴい不確定要素なだけどっ！？」

シャロンって言うのは、正式には”シャロン・アップルトン・システム”って言って、今大暴れしてる【ゲッター・ニンジン】に搭載されてる某マギと同じ三位一体の疑似人格型制御コンピュータらしいんだ。

元々は束ちゃんとお姉ちゃんが、某ヴォーカロイドのプログラムを色々いじって機能拡張してるうちに出来上がったプログラムらしいんだけど…

ミズキの説明によれば…

ドラゴンとしての自分…

ライガーとしての自分…

ポセイドンとしての自分…

で構成されてる…ってえ〜っ!?

「色々駄目じゃん!! それって陸海空で闘争本能剥き出しの殺る気満々ってことだよなっ!?!」

『心配無用です あれにはゲ ター線とか危ない物は使ってませんから ただちよこつと熱核反応炉とかを3基積んで直列に繋いだりしてますから、下手に破壊されると少お〜し地形は変わっちゃうかもしれないけどお〜』

それ違う意味で…というかストレートな意味で危ないって!!

「ぼ、ボクってそんなのに乗っけられて打ち出されたの!?!」

『心配ご無用ですよ〜 燃料漏れとかありませんでしたし』

あつたら今頃ボクはこうして歩いてないと思うけどなあ…

『シャロンさんはあれでアキちゃんの密入国をサポートしてくれてるんですから、気にしたら駄目です』

いや、密入国になっちゃったのは、東ちゃんとお姉ちゃんの送り出し方が問題であって…
いや、それは言ってもしょうがない。

それより、

「潜入を破壊工作じゃなくて破壊活動でうやむやにするってやり方は、実際どうなんだろ…?」

東ちゃん、お姉ちゃん…

破壊工作と破壊活動は別物だからね?

『それよりもアキちゃん、そろそろ急がないと【藍越学園】の入試に遅刻してしまいますよ?』

「そうだったあゝっ!!」

ボクとミズキは、慌てて走りだした。

後ろからさっきから連続した爆発音とか聞こえてるけど、男は後ろを振り向かないものだよな? ね?

さてさて、やってきた試験会場だけど。

ボクは外まではミズキの道案内と、内部の係員の人の案内で会場へ来たんだけど…

「えっ？ なんだって”IS”があんなところにあるんのさっ!？」

あの人型のロボットっぽいのって”IS”だよね？

『さあ？ それは私にも…』

”IS”…正式には【インターナショナル・ストライカー】。

東ちゃんやお姉ちゃんが開発してて、ボクがこの3年間テスト・プレイを繰り返した最新鋭超体感ゲーム機だ。

例えば…【戦場の絆】ってゲーム知ってる？

あれはモビルスーツってロボットのコックピットを模したゲーム筐台に乗り込んで戦う戦術シミュレーションだけど、ISはその進化版みたいな物で、

『マルチフォーム・パワードスーツを来て、世界を舞台に戦うんだ
ぴよん』

って束ちゃんは言ってたっけ…

詳しくは知らないけど、束ちゃんのお姉ちゃん以外のもう一人の親友の”ちーちゃん”って人がその名人で、【モンド・グロツソ】って世界大会で優勝してるんだってさ

(ボクもいつか出場したいなあ)

意外と得意なんだよ？

「でも、造りは新しそっただけど、ちょっとデザインは古い…かな？」

ラスボス機の白騎士に、ザコの打鉄のイカツさを合わせたようなデザインだけど…

ボクがISに触れようとした瞬間！

「明久？ 明久なのかっ!？」

声に振り返ったボクの視線の先にいたのは、下着…

じゃなくて、肌着っぽいスポーツウェアを着た濃いココア色の短い髪と、エメラルド色の瞳を持つ”美少女”…

でもボクにはわかる。

この少女は、男でも女の子でもない、”第3の性”だって…

だって…

「もしかして、”秀ちゃん”…?」

「やっぱり明久なのじゃなっ!」

3年振りに再会した幼馴染みは、ボクに駆け寄ってきて…

「会いたかったぞっ!」

”どすんっ!”

ボクにタツクルするとそのまま押し倒して、そのままマウント・ポジションから…

「3年間も連絡を寄越さず…心配させよってからに!」

”Chu!”

強引に唇を重ねた…

『男の娘同士のキス! 男の娘同士のマウスtoマウス!! 嗚呼、カミサマ…ここは天国ですかあ~~~~っ!?!?!?』

…ミズキ、うるさい。

久しぶりに再会したボクと幼馴染みの木下秀吉…

あれ？

でも、秀ちゃんがどうしてここに？

秀ちゃんも、【藍越学園】を受験するのかな？

だったら嬉しいなあ〜

【Episode 00】第2話 "夫を舞うのはゲッターなれど、バ

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

IB…インフィニット・バカトリオ（無限の三バカ）の二人目は、
なんと秀吉でしたあゝ

まあ、三人目は本来の…ですが（笑）

どうやら、この異色コラボも興味を持って下さる読者様もけっこう
いらっしやるようで、作者としては嬉しい限りですm(____)m

今は取り敢えず、ネタと勢いがある間は書きためるという方向です
が、それが尽きても需要があるならレギュラー連載とかも考えて行
きたいと思っています。

そんなこんなで次のアップは早くて明日ですが、皆様のお許しがあ
るなら取り敢えず集中連載を試してみようかと思っています。

それでは、また次回お会いできる事を祈りつつ(____)

皆様、こんにちは

何とか今日も生きてる暮灘です（^^；

他の暮灘現役連載作品をご愛読の皆様、一時的にですが、少しの間この”IB”の短期集中連載に傾注させていただきます（――）

詳しくは活動報告に描きますが、急速に脳内画像が活性化してまして、勢いとネタがあるうちにある程度の形を作らないと、消えて二度と書けなくなりそうなので（^^；

36

さて、今回の見所は…

秀ちゃんが肉食系小悪魔（！？）です。

アキちゃんの可愛さが書いてて変なテンションになるぐらい異常です。（”バカテスぢゃ”を参考にしたからか？）

ミズキは（主に自分に）素直なデバイスです。

アキちゃん&秀ちゃんのIB作中の強さレベルが、ちょっとぴり分か

ります。

そして、ラストにバカトリオの最後の一人が…

こんなエピソードですが、楽しんでいただき感想なんかをいただけ
た日には、作者大喜びです(o^_^)b

吉井明久と木下秀吉は、小学校時代を共に過ごした親友同士である…

3年振りに再会する二人の幼馴染み（ツイン男の娘）…

押し倒される明久アキちゃんに、唇を重ねる秀吉…

いや、だから同性の親友だってばさ（汗）

” ぴちゃ…くちや…”

淫らな水音が場に流れ、絡められる舌は上手く甘く…

明久は、ただされるがままに秀吉に口内を蹂躪されていた…

そこに抵抗の意思は最早無く、明久はその甘美な感覚に身を任せて…

（明久…）

（秀ちゃん…）

『 Yes！ Yes！ ヘブンス・ゲートはすぐそこですわ〜 』

このまま年齢制限に引つ掛かりそうなシーンが続くと思いきや…

” ちゅぱっ…つうっ ”

二人唾液が混じりあった混合液が糸を引いた…

「久しぶりの明久の唇、実に美味だったぞい」

「もう…秀ちゃん、相変わらず強引だよね？」

秀吉は立ち上がり、

「又シモこういうシチュエーションの方が好ましいじゃろ？ なんせ、昔は自分からはキス一つできぬ奥手じゃったからの〜」

意味ありげに笑った。

押し倒された姿のまま明久は、顔を真っ赤にしてソツポを向き、

「…ばか」

と、小さく呟いた。

「それにしても、そそる姿じゃのう〜」

と、妙に色気のある舐めるような視線を注ぐ秀吉。

「スカートがはだけて細い脚に、女物の可愛いデザインデザインの小さな下着が丸見えだぞい」

「やんっ!」

慌てて起き上がってスカートを押さえる明久。

「秀ちゃんのバカーっ!!」

「クツクツクツ…3年という歳月は、こうまで人を変える物かのう？
明久が女物の下着を履きこなすようになるとは…これは愉快じゃ」

「うっっ…」

明久はペタンと座りこんだ姿勢で、涙目+上目使いというある意味最強コンボで、

「だって東ちゃんもお姉ちゃんも、こっぴつ下着しか用意してくれないし…」

秀吉は、クスツとアルカイツク・スマイルを浮かべ、くま跪くように明久の耳元に唇を寄せると…

「今のお主は本物の少女のようじゃ…明久、お主は愛らしく可憐じゃ
実にワシ好みじゃぞ?」

明久はただでさえ赤かった顔を更に紅らめ、

「も、元から可愛い秀ちゃんに、い、言われても…」

だが、明久にこれ以上反論させる気はないのか秀吉は、

”ペロツ”

「ひゃん!？」

突然、耳の穴を舐められて、その擦くすくったさに確かに秀吉の言うように少女のような小さい悲鳴を上げる明久だった。

「秀ちゃんのばか…きらい…」

床に”のの字”を書いて拗ねる明久に、秀吉は苦笑しながら、

「すまんすまん。つい悪ふざけが過ぎたわ。じゃが、それも明久の愛らしさ故…許せ」

「あううう…っ…」

ワタワタする明久を満喫したのか秀吉は、ふと真顔になり、

「ところで明久よ、いくつか質問があるのじゃが…良いか？」

「う、うん…」

「先ずは一つ。ワシが明久だと一目でわかった理由なんじゃが…もしかしてお主、この三年間、身長が伸びてないのではないのか？骨格も殆ど変わってない…寧ろ、か細くなった気がするのう…」

「うぐう〜」

「それに明久よ…お主、そこまで声が高かったかのう？ その、何というか…」

秀吉は言葉を選ぶようにして、

「こつこつという表現は適切かどうか分からぬが…お主の声、某錬金術師アニメに出演していた時の”釘宮理恵”の声にそっくりなのじゃが…」

「うみゅっ!？」

そうなのだ…

今までの明久は、全て世に言う”くぎみー声（笑）”しゃべっていたのだっ!…!

さあ、今までの明久の台詞を全てくぎみーボイスで脳内再生してみよう…

…

…

よ〜ん この束さんが全知全能の一部を傾けて作ったマシンだも
ん 戦闘のリアルさは、リアルって言葉の常識を覆すレベルかも
よ〜ん
』

「実際、スツゴイリアルでさあ ”IS” で全てのステージをク
リアする為には、軍隊でエースくらい軽くなれる技量と判断力がい
るって束ちゃん言ってたっけ…」

「それはまた過酷じゃの〜。んっ？ その言い方じゃとお主はクリ
アしたのか？」

「したよ〜 各勢力のエース騎はそんなに強くないけど、隠しキ
ャラで”真・ラスボス”の【白騎士】っていう機体がメチャクチャ
強くてさ。ビームを斬り払うとか”悪質なチート技（笑）”使って
くるし…1機でゲーム・バランス壊しまくってるって感じかな？」

すると秀吉は演技ではなく素で驚いた顔で、
「それは凄いのじゃ！ ワシも実はさつき”代表戦モード”とやら
でプレイしてな。ブリテンのエースには何とか勝てたが、チャイナ
の【見えない砲撃】に苦戦してのう…引き分けに持ち込むのが清々
じゃったわ」

うんうんと腕を組んで頷く秀吉。

明久は合点がいったという顔でポンと手を打ち、

「あつ！ それで秀ちゃん、そんなスポーツ・ウェアのインナーみ
たいな格好してたんだ？」

「うむ。なんでも全身で操作するゲームらしいので動きやすい服装が奨励されるてようだな」

「そっかあゝ。確かにそうかもね？ んゝ、でも始めてのプレイでそこまで行ったのって、むしろ凄いと思うよ」

すると秀吉は苦笑しながら、

「そうでもないぞい。あのブリテン騎はビット…いや”BT”だったかのう？ とにかく遠隔操作砲台を出す時に止まる妙なクセがあるじゃろ？ そこを突いて接近戦に持ち込み仕留めただけじゃ」

「えっ！？ よくそのクセをファースト・バトルで見抜いたねっ！？」

秀吉はフフンと少し自慢気に、

「明久、忘れたのか？ ワシはこう見えても役者の卵じゃ。人を観察してクセを見抜くのは、お手のものじゃ じゃなければ、即興で真似て演じるなど出来はせぬ」

今度は明久が関心したように、

「ほえゝ…秀ちゃん、やつぱりスゴいや！ でも、近接の間合いに入る前にミサイルとか撃って来なかった？」

すると秀吉は苦笑いで、

「あの程度のヒョロヒョロ弾に当たってやるほど、お人好しではあらぬわ。しかも弾幕ならともかく、数はたった二発じゃろ？ 一呼

吸で五発飛んでくる姉上の【閻魔五段突き】に比べれば、どうい
うことはない」

明久は、文武に秀でた秀吉の双子の姉を思い出しながら、

「ゆーこちゃんも相変わらず?」

秀吉は大きく頷き、

「うむ。相変わらず修行三昧じゃ。姉上の武の志は高いからのう…
何しろ、目指す先は【何人たりとも只の一撃で葬れる拳】…真の
必殺拳”じゃからな」

それを習得して木下優子は何をしようというのだろうか? (汗)

「明久、もし良ければお主のプレイを見せてはくれぬか? なに、
わりと血沸き肉踊るゲームだったのでな。少し上級者のプレイを盗
みたいのじゃ」

秀吉の急な頼みに明久は困ったように…

「それはいいけど…でも、【藍越学園】の受験が…」

すると秀吉、「おや?」という顔で、

「お主も藍越を受験するつもりだったのか? なら、ますます問題

ないぞい」

「なんで？」

不思議そうな明久に、

「ワシも藍越を受験しようとしたのじゃがな。真っ先に言われたのが、着替えてそれをテスト・プレイすることだったのぢや」

「へえ〜。受験にゲーム使うなんて、随分ユニークなんだね？ 反射能力とか空間認識能力とかを測定したいのかな？」

「さてのう…ん？」

秀吉は、微かに聞こえた足音に振り返り、

「おお、”一夏”戻ったのか？」

視線の先にいた学生服姿の長身少年に微笑んだ。

「ああ。ただいま、秀吉」

一夏は秀吉に親しげに微笑み返した後、明久を柔らかい視線で見つ

「俺も出来れば君のプレイ、見てみたいんだけど…いいかな？」

今、ここに”三人のバカ”が集結を果たした…

”運命のバカ達”を…！！

歴史は、世界は彼らに何をさせようというのか…！！？

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

昔からお世話になってる皆様からのご感想も嬉しかったし、同じく
らい新しい読者様からの感想も嬉しいものです

いや、というかISとバカテスのマッチングが上手くいってるのか
イマイチ自信が(^^);

今回は、秀ちゃんが実は強キャラであることが判明…
って、シミュレーションとはいえ、せっしー倒して鈴と引き分けて
るやんっ!?

明久は…汝、問うなかれ(^|^^;)

ラストにいつくんがちよっぴり顔を出しましたが、次回は本格的コ
ンタクトの予定です(o^_^)(b

それでは、また次回お会いできる事を祈りつつ(____)

【Episode 00】第4話 "アキちゃんのキーワードは美少女

皆様、おはようございますm(____)m

変な時間に失礼します。

色々あってまたまた眠れなかった暮灘です(^^;

どうせ眠れないのなら、開き直って1本書いてしまえ

と、書いてたら本当にIB第4話が出来上がってしまいました(^^

ー^;))

さて、今回のエピソードは...

の前に注意点。

現在と同じ路線の

【心優しくて鈍感で清く正しい一夏】

をご希望の読者様は、お戻りなされた方がいいです。

何故かというと、"IB"の一夏は、

【大の"女尊男卑"嫌い】

で、強者と言いながら、いざというとき弱者のフリをしたり、実態のない強さをひけらかし威張りちらすタイプが、憎悪するほど嫌いです。

だから…

ぶっちゃけ、女の子にも容赦無いです（えっ？）

『女が強いつてんなら、手加減は要らないよな？』

って本当に手加減しないタイプです（^| ^ ;）

ある意味、真っ直ぐな少年が歪んだ価値観のせいで”真っ直ぐ歪んでしまった”というか…（ ; ^ | ^ A

そんな一夏で構わないという方のみお読みください m（——） m

内容は、前回第3話の一夏視点と、一夏の中学時代とかが語られますよ（o ^ . .） b

さて、少し時間を巻き戻そう。

ついでに視点も変えてしまえ。

そうすれば、また別の何かも見えてくるだろうから。

世界は常に多角構造で、人の主観で全てを把握できる物ではない。

何故なら、人は自らの立ち位置で見える物しか主観として認識できないのだから…

と、真面目に語った所でIBにシリアスを求めるなど、砂漠で水を求めるが如しなのだが（笑）

?? side .

(ぶ、ぶ、ぶ…)

【試験会場】テスト・スペースに戻ってきたら、同じ中学から一緒にテスト受けに来

たダチが、見ず知らずの女の子押し倒してました…

(しかし、女の子が女の子襲ってるようにしか見えん…さすがは秀吉！)

「秀吉：恐ろしい(男の)娘」

いや、感心するところじゃないだろおーっ！？
しゃんとしろ、”俺”！

え…

取り敢えず、状況を整理しようぜ？

なんか、何故か試験会場に置いてあった”IS”：【インフィニット・ストラトス】を俺が触ったらいきなり起動した。

そうしたら、係員だか研究員だかがワラワラ出てきて、”俺”は連行されましたとさ。

(よし、ここまではOKだ)

えっ？

詐欺じゃないんだから俺俺言ってないで、そろそろ名乗れって？

あっ、そうだったな。

コホン…

我が名は”織斑一夏”おりむら・いちか！！

一片の曇りなく鍛え磨かれし、一振りの真鋼まがねの刃なりっ！！

どう？ 決まった？

えっ？

『何その中二病的な名乗りは？』だって？

酷えなあゝ。

いや、師匠に名乗りは正々堂々とやれって言われてるもんでね。

んじゃあ、普通に…

俺は”織斑一夏”。

俺がホンのガキの頃…

まだ、”IS”なんて妖しげなモンが出てくる前の時代…【男女平等】って時代を知ってる身としちゃあ、【女尊男卑】なんて思想が気色悪くてしょうがない男だ。

そんな理由で、古式の実戦剣術とかその辺なんぞを少々かじってる。

武の世界はいいぜえ〜！

男も女もなく、ただ強いか弱いか…それだけしか基準がないっての

がシンプルでいい。

まあ、そんな生き方してりや当然、『ISは女しか云々』と、妙な言い掛かりを付けてくる奴は事欠かないが、その時は、

『んで、お前の身内にIS乗りはいるのか？』

と先ずは聞く。

口先三寸の嘘をつく女は多いが…99%以上はいないわな。

(そりやそうだ。全世界に束さんがばら蒔いたコアの数は、精々400ちよい…)

生産されてるISの数は、実際にはもつと少ない。

身内にIS乗りがいる確率なんて、ぶつちやけ宝くじに当たる確率より低い。

そこで大人しく引き下がりがいいが、大抵は引き下がらない。

だから”軽く”実力行使。

首根っこを鷲掴みして吊り上げる。

所謂、ネックハンキング・ツリー(首吊りの木)ってプロレス技さ。

『俺の握力は200kgを軽く超える』

うそぴょん。

その7割位が精々だ。

『賭けようじゃないか？ 俺がお前の首をへし折るのが早いか、お前が女の力と主張するISが駆けつけてくれるのが早いか…なんてのはどうだ？』

そして、更に心を粉碎する為にこう続けるのさ。

『時間が足りねえってんだったら…俺は別にお前を犯しながら鉄拳叩きこんで、くたばるまでって条件でもいいんだぜ？』

まあ、ここまでやると恐怖と絞まってるので、大半は失禁する。

だから、言っただけだよ。

『テメエの物でもねえ力をひけらかすからこういう目にあう。所詮お前は純粹な力の前じゃあ、小便垂れ流す程度の抵抗しかできない、薄汚いクソ袋に過ぎんのさ』

ISってのは、殆どが国家管理だ。
個人所有してる、あるいは自分の意思で勝手に持ち出せる人間は殆どいない。

たかが一人の民間人の為に出てくるなんざ、まず有り得…滅多にない。

そして、地べたに落とされ、不様に這いつくばりゲホゲホ咳き込んでる顔面に…

『呪うなら自分の力のなさを呪え。恨むなら、自分の手の平にない力を威を誇った己の愚かさを恨め…お前は【無力】だ』

靴底でヤクザキック気味に”そげぶっ！”して、はい終了

ああ、これでも気を使ってるんだぜ？

死なないor気絶しないように、だがしっかり痛み感じるように鼻骨や前歯をへし折るのは、これで結構力加減が難しい。

それに俺は、そのまま放置して帰っちまうからな。

鼻骨や前歯がグチャッと潰れて血塗れ顔面の女なんて、普通は犯そうとは思わないだろ？

むしろそういう方が萌えるって変態に運悪くエンカウトしてブチこまれようが、お持ち帰りされようが知ったこっちゃない。

あん？

お前はヤらないのかだって？

俺は、【女尊男卑】なんて薄気味悪い”宗教”に感染した”狂信病”
”なんかにつつまみたくはないからな。

思想的疫病に体液感染するなんざ、御免被るよ。

(そついや、中1の頃に俺の行動に文句つけてきた【主義者】の女教師をフルボッコにしたっけか…)

ああ、”主義者”ってのは自分を性革命運動の闘士を気取ってる【好戦的性差別主義者】の事だ。

ISが出てきてから、自分達の社会的価値が上がってと勘違いした無能な俗物一派ってどこか？

なんの事はない。

ちよいと趣向を凝らして罫を張り、頭から少々熱湯ぶっかけて、追い討ちに唐辛子汁(キムチ鍋のもとだっけ?)をぶっかけ、痛みで転げ回ってるところを蹴り続けただけだ。

なんか途中で命乞いしてたみたいだけど、俺は構わず蹴り続けた。

聞く必要ないだろ？

殺すような蹴り方してないんだから。

ただ痛みで気絶できねーように蹴ってただけだ。

んで、その誰にケンカ売ったかも理解してないマヌケ教師の神経だ

か思考だかが擦り切れた頃に駆け付けた教師達…

俺は足元の”残骸”の頭を踏みつけながら、特に同類の”主義者”教師に中指一本をおっ立て、『かもーん』と指をクイクイ動かしながら、

『んで、次は誰がこうなりたい？』

と、俺の上履きの下で壊れたデータディスクみたいに「ごめんなさいごめんなさい」と繰り返す汚物を中指から切り替えて立てた親指で指した。

結局、その事件はうやむやにされた。

俺は別にカンカン（少年鑑別所）送りになっても構わなかったんだけど、【千冬姉】ともめたくない”上の方”が揉み消したらしい。

ああ、言っとくけど女教師だったスクラップ、怪我自体は大したことないぜ？

まあ、あの様子じゃ【鉄格子のはまった病室】からは、しばらく出れそうもないけどね。

それにしても…

(千冬姉の主義者嫌いは有名だからな…)

我が姉ながら、主義者どもが千冬姉を賛美する集会に乗り込んで、

『私をキサマらのくだらん思想の広告塔にでもしてみろ…その首全てを跳ね飛ばし、醜い顔をお台場で晒し首にしてくれる』

って言い切った時は、実に痛快だった!!

(…というか、あの目はマジだったな…)

きつと千冬姉には、俺よりデカいき。タマが付いてるに違いない。

いや、面と向かってそんな事を言った日には、”お台場の晒し首”になるのはきつと俺だけだね(汗)

ま、その事件が現実にあったって証拠は、俺に付けられたアダ名…

【狂犬】

しか残ってないけどな。

簡単に言えば、俺は…

『力を誇示していいのは同じく力でねじ伏せられる覚悟のある者だけ』

って当たり前の理屈を理解しないまんま、テメエが手にした力でもないのに威張り腐った奴が、男女以前に嫌いって事だな。

だから、ISがどうこうつてのを笠に着て女性優越論を語る奴は、同質の”力”で【説教(そげぶっ!)】して、その【思い上がり(げんそう)】を砕く事にしてる。

格好いい呼び方するなら、さしずめ【高慢殺し(プライド・ブレイカー)】ってところかな？

そりゃそんな生き方をしてりゃ、どっかの古典小説じゃないが、【俺は友達が少ない】になっちまうと思うが、どういう訳か要注意危険人物の筈なのに、どういう訳か俺には友達が少なくは無かった。

確かに俺の悪名を利用しようとして接触してきた奴もいたし、実際に利用した愚か者もいたが、そういうのは問答無用で”そげぶっ！”だ。

まあ、それはさておき中でも特に仲が良かったのは、【五反田弾】
って気のいい茶髪ロン毛と…

(今押し倒されたままの女の子を、妙に色っぽい目線で視姦(笑)してる)

【木下秀吉】だ。

気が付くと、秀吉は不意に真面目な顔になり、女の子と話し出した。

どうも様子を察するに、あの女の子は秀吉の昔馴染みらしい。

(女の子に興味しめさないから、容姿込みでてつきりアッチ系かと

思ってたけど…)

なるほど…

ああいう感じの娘がタイプだったか…

(確かにうちの中学には、ああいう”真性お嬢様系”はいないしな…)

あるいは…

(実はあの娘が想い人で、だから他の娘に興味を示さなかったとか、か?)

秀吉の会おう前の過去に興味を持った俺は、少し聞き耳を立てる事にした。

「なるほどのう…投薬実験や食事の調整か。最近のゲーム開発は随分と過激なのじゃな？」

ちよつと待て！

今、あの女の子はゲームって言わなかったか…？

「実際、スツゴいリアルでさあ ”IS” で全てのステージをクリアする為には、軍隊でエースくらい軽くなれる技量と判断力がい

るって束ちゃん言ってたっけ……」

（東さん…アンタ、あの娘に会っていたのか？）

いや、問題はそこじゃない…

（その娘に何を教え、何をやらせてたんだ…？）

会話から推測すると、ISをゲームか何かと思いつまされていた…？
（バカなっ！？ …いや、でも有り得るか？）

普通の人間の目の前にISを持って来たって、それがISだとは思わないかもしれない…

（俺だって、”あの時”にISを装着してた千冬姉を見なければ、あれが本物のISだって気付かなかったかもな…）

ISはその希少性から、一般人が生で見る機会は殆ど無い。

その先入観から、目の前にISを置かれても普通ならISを模したシミュレータ、ゲームと言われたらゲームと信じるかもしれない…

「それはまた過酷じゃの。んっ？ その言い方じゃとお主はクリアしたのか？」

「したよ」 各勢力のエース騎はそんなに強くないけど、隠しキ

「ヤラで”真・ラスボス”の【白騎士】っていう機体がめちゃくちゃ強くてさ。ビームを斬り払うとか”悪質なチート技(笑)”使ってくるし…1機でゲーム・バランス壊しまくってるって感じかな？」

(ちよっ!?!? まてっ!?!?)

いくらシミュレータだからって、あの女の子は、【あの”白騎士”】を倒したってのかよっ!?!?

「明久、もし良ければお主のプレイを見せてはくれぬか? なに、わりと血沸き肉踊るゲームだったのでな。少し上級者のプレイを盗みたいのじゃ」

「それはいいけど…でも、【藍越学園】の受験が…」

(ヤバい…)

俺もあの娘のプレイを見たくなってきた…!!

「お主も藍越を受験するつもりだったのか? なら、ますます問題ないぞい」

「なんで？」

「ワシも藍越を受験しようとしたのじゃがな。真つ先に言われたのが、着替えてそれをテスト・プレイすることだったのぢや」

「へえ〜。受験にゲーム使うなんて、随分ユニークなんだね？ 反射能力とか空間認識能力とかを測定したいのかな？」

気が付いたら、俺は二人に向かい歩きだしていた。

「さてのう…ん？」

俺の気配が足音に気付いたのか、秀吉は振り返り、

「おお、”一夏”戻ったのか？」

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

実はタグの【残酷な描写】云々というのは、この一夏の過去の為につけたような物です(^^);

作者的には、本当は【人間として妥協できないくらい真っ直ぐ過ぎて、歪んだ世界からは歪んで見える一夏】は大好きなんです、皆様の目にはどのように映ったでしょうか？(^^);

何というか…書いてる作者さんが言うのもなんですが、上条さんの言おうか、悪条さんの(笑)と言おうか(^^);)

今はただ、IBの一夏が読者様に嫌われない事を祈るのみッス

今回はいよいよ明久のIS操縦技術が明らかに？

それでは、また次回があることを祈りつつ(____)

追伸

一夏は何人かのESヒロインのフラグが消滅するのと引き換えに、
既にこの時点で某バカテス・ヒロインに初期フラグが立ってたりし
て…

皆様、こんばんわー

またしても、同日二度目のご挨拶な暮灘です (^ ^ ;

書き上がったので、前倒しでアップです (^ | ^ ;)

本来ならご感想への返信を書きつつ、ゆっくり明日のアップに控えるのがスジってものですが…

え〜と…

画像が回っちゃいました (; ^ | ^ A

今回は、そうですね…アキちゃん、秀ちゃん、いつくんの【トリオ】としての原作の立ち位置【を確認できるエピソードかな?

取り敢えず、難しい理屈は抜きにして、メインタイトルにもなってる【バカトリオ】の掛け合いを、読者の皆様に楽しんで貰えたらなあ〜と思ってます (o ^ - ') b

追伸

書いててアキちゃんがヤバいくらいに…

一夏、頼むからここでフラグ立てるなよ? (笑)

「さてのう…ん?」

秀吉は、微かに聞こえた足音に振り返り、

「おお、”一夏”戻ったのか?」

吉井明久と木下秀吉…二人の男の娘の前に姿を現した織斑一夏は、

「俺も出来れば君のプレイ、見てみたいんだけど…いいかな?」

と提案した。

「え〜と…秀ちゃん、お知り合い?」

明らかに警戒の色を滲ませながら、ササツと小動物チックに秀吉の背中に隠れる明久に、一夏は思わず苦笑する。

「ふむ、”尻合”か…まだ尻は貸しておらんな。ワシは一向に構わんのじゃが、一夏に生憎その気が無くてのう」

悪戯っぽく笑う秀吉に、

「ライ!…秀吉が言うと洒落にならないって。というかガチに取られるから自重な」

「ツレないのう。またそういうところが、一夏のソソる部分じゃかな」

一夏はハアと小さく溜め息を突き、

「秀吉、毎度思うが…そろそろ掘るのが好きなのか、掘られるのが好きなのかはつきりしてくれ」

すると秀吉、ふふんと平たい胸を張り、

「そんなもの、相手次第に決まっておろう? 明久なら掘る方が、

一夏なら掘られる方が具合良さそうじゃて　ワシはどっちもイケるぞい」

「みやつ!?!?」

思わず尻尾を踏んづけた時の仔猫みたいな声をあげたのは、当然一夏ではなく明久だ。

「明久…?」

「ワシの背中で顔を真っ赤しながら、仔猫のような仕草で警戒してる可愛い生き物が、我が最愛の幼馴染みの”明久”ぢや」

秀吉…君は背中に目でも付いてるのか?とツッコミたくなるとこだが、秀吉のスキルやスペックを考えると、何となく不思議じゃない気がする。

それはともかく…

一夏 side -

(明久って男の名前だよな…?)

秀吉の同類?

(いや、秀吉より更に女の子っぽい男の娘なんて、この世に有り得るのか…?)

それに何より…

「ぱんつ、女の子用だったし…」

あっ、しまった!

思わず口に出しちゃったぜ。

「ミッ!?!」

「お主…すっかりくつきりはつきり見ておったようじゃな? 一体いつから覗いておったのじゃ? 覗き見プレイあまり感心せぬぞ?」

目を潤々させる”明久”って呼ばれてる女の子に、ジト目の秀吉…

「うわあ〜ん！ 見ず知らずの男の子にパンツ見られたあ〜！ しかも女の子用履いてるところ〜！ 秀ちゃんが悪いんだあ〜っ〜！」
泣きながら背中をぽかぽか叩く明久に、

「ぬおっ！？ 泣くな明久。そ、そうじゃ！ お詫びに後でワシのぱんつも見せるぞい！ なんなら、オマケに一夏のズボンもズリ下げてしんぜよう！」

「下げんなっ〜！」

優しそうなパツチリな瞳に、白いリボンを巻いたサラサラのミルクティー色の長い髪…

高級そうなブレザーにチェック柄のミニスカート。
今にも折れそうな細い首に巻かれたチョーカーに下がる、銀の下金によく磨かれたピンク色の飾り石をはめこんだ手の込んだ豪華な十字架…

（さしずめ、何処かの十字教系お嬢様ミッション・スクールの制服ってどこか？）

そんな娘が、どうして東さんと一緒にいたのかは謎だけど…

（なあ、やっぱり…）

今時珍しいぐらいウブな普通の……
いや、”極上の美少女”だよ……なあ？

一夏 side end .

「うゝむ、明久よ。この覗き魔の名は”織斑一夏”おりむら・いちか”と言ってのう……
取り敢えず、【女尊男卑】を掲げる女子を、片っ端から”そげぶっ
！”しまくるのが趣味という中々の危険人物なのじゃが……」

「えっ!？」

短い悲鳴じみた驚きの声を上げる明久だったが、

「ヒドッ！ あのなあ秀吉…流石にその表現は間違っちゃいないが、
誤解を招き過ぎるぞ？ 確かに”そげぶっ！”はするが……」

「…するの?」

秀吉の背中に完全に隠れていた明久がそおくと顔を出した。

(うつ！…涙目が反則気味に可愛いんだけど…)

ばっちり明久と目があった(+明久の台詞も取りようによっては…)
一夏はドギマギしながら、

「い、いや、せめて申し開きぐらいは聞いてくれ…なっ?」

「…うん」

不安げな表情で頷く明久に動揺しまくる一夏。そして…

(こ、これはなんともレアな一夏なのじゃあ…)

見た目は飄々としてるが、

(それにしても、名前以外に掘るとか掘らんとかパスを出したやつ
てるのに、まだ明久の正体に気付かんとは…)

実は、内心で大爆笑してる秀ちゃんであった。

「簡単に言えば、降り掛かる火の粉を払っただけで、俺から仕掛けたのは、”教師”って学校じゃ絶対的に強い立場に立ち、生徒を煽動し洗脳してた悪質な”主義者”を一匹肅正した時だけだ。OK？」

「う、うん。おーけーかも…」

まだぎこちないが、何とか笑顔をつくる明久に、一夏はホッと安堵の溜め息を漏らす。

（こつこつ硝子細工みたいに繊細そうな女の子は苦手だ…正直、どう扱っていいやらだぜ）

いや…実は女の子違うのだが、今のいっぱいっぱいの一夏にそれを知る術はない。

（俺の回りには、本気でいなかったタイプだしな…俺に寄ってくる女なんぞ、【女に頭をさげないなんて生意気】なんてクソくだらない理由で因縁吹っ掛けてくる”主義者かぶれ”のアホ牝か…）

あるいは、

（”優子”みたいに男女の区分なんてどうでもいい【武闘派】がいなかったもんなあ〜）

一夏の脳裏に浮かんだのは、秀吉と相似形のようにそっくりで、中身はある意味正反対の双子の姉だった。

かつて、拳と木刀というエモノの差はあれど、心行くまで武という
肉体言語で語り合った”ハンサムな彼女”…

【木下優子】の笑顔が…

（アイツの事だから、今頃どこかで元気で拳をブン回してるんだろ
うなあ〜）

己の命を狩り取りかけた優子の破巖拳を思い出し、つい内心で苦笑
する一夏だった。

「まあ、明久よ。一夏が何やら必死に弁明しておったが、【その男、
危険につき】なのは確かじゃが、無差別に理由なき暴力をふるう訳
ではあらぬ。まあ、言い方を変えるなら…」

秀吉は意味ありげにニヤニヤしながら、

「世の不条理を納得できず、まだ実力行使でしかあらがう術の無き

直線的で直情的な男よ。故に悪人ではあらぬ」

「…秀吉、それは俺を遠回しに”単純バカ”と言いたいのか？」

「さあのう…それは、お主で答えを出すのが一番じゃろって」

秀吉がそう切り返すと、

「プツ…クスクス　うん、秀ちゃんの言う通り、悪い人じゃないみたいだね？」

明久はすつと秀吉の背後から出てきて、

「それじゃあ、改めて…ボクは明久。吉井明久　秀ちゃんとは小学校からの親友をやってます　さっきは変な態度をとってごめんね？」

「おつ、おつ。別に気にすんな。俺も気にしてないからさ」

「うん　ありがとお」

(ぼ、”ボクっ娘”おっ!?!…り、リアルで見たのは始めてだぜ…)
どうやら”にぱあっ”と擬音が付きそうな明久の無防備な笑顔と【ボクっ娘】というパーソナリティの前に、一夏の中にあつた『吉井明久って男の名前じゃん?』って疑問は、跡形もなく消滅したらしい。

(お嬢様なのに、ボクっ娘…これがいわゆる、)

「ギャップ萌えって奴か？」

「ほえ？」

一夏の言葉に、明久は不思議そうな顔を返したのだった。

「え〜と…”おりむらくん”でいいんだっけ？」

「一夏で構わないぞ？」

すると一夏の言葉に秀吉も相槌を打ち、

「うむ。それが嫌なら”覗き魔”でもよい。ワシが特にさし許す」

「俺が許さねえよっ！」

ツッコみ返す一夏に、秀吉はやれやれと首を左右に振り、

「ケツの穴の小さな男だの〜」

「小さくて上等！ ガバガバだったら大変だろうがっ！！」

そんな二人の掛け合いを見ながら、再び明久はクスクス笑い、

「二人はとっても仲良しさんだね」

「「多分それ、かなり誤解入ってると思うぞ？」（思うんじゃが？）」
「

「やっぱり息ぴったりじゃない えっと、それはともかく…いち
かくん…は、ちょっと言いにくいかな？」

明久は少し考えて、

「じゃあ、”いっくん” あれ、この呼び方ってどこかで聞いた
ことあるよっな…？」

（多分それ、束さんからだと思う…）

と一夏は口に出しては言わなかった。

『なんだかややこしくなる気がする…』

という野生の直感が、おそらく働いたのだろう。

だから、代わりにこう答える。

「別にそれで構わないぞ？」

「じゃあ、僕も好きに読んでいいよ」

「ふうん…じゃあ、面倒なの苦手なんで、短く”アキ”でいいか？」

「うん」

（ちゃん付けされないのって、なんだか新鮮だよ）

と明久は思ったが、

「いつくんもボクのプレイをみたいって事で良いのかな？」

「ああ。いいか？」

明久は満面の笑顔で、

「ぜんぜんおっけーだよ」

と、明久は【そのままの格好】で乗り込もうとするが、

「おい、着替えなくて良いのか？」

すると、明久はどこか遠くを見るような目で…

「大丈夫だよ…慣れてるから…」

そして、少しだけ涙を瞳に滲ませ…

「魔法少女風フリフリとか、又コミミメイドとかより、ずっとマシな格好だもん…だからいいんだ…」

「明久よ…お主よほど過酷な日常を送ったようだのう…」

秀吉の言葉に、明久の瞳から雫が一つ零れたのだった…

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(_____)m

何だか三人のノリが良すぎて、肝心の明久のIS操縦技量を書くスペースが無くなり、

「しまったあ〜っ!」

と思った暮灘です(^^);

いや、前書きにも書きましたが、アキちゃんの可愛さがヤバい事に(^^);

個人的には秀ちゃん&いつくんの掛け合いがかなり面白くて、自分で書いてて笑ってました(笑)

そして、いつくん&アキちゃん…

ま、まだフラグ立ってないよね?(汗)

思わず読者様に聞いてしまう暮灘はヘタレです。

いつくんと【初期フラグが立ってるバカテス・キャラ】はもうお分かりですよね?(^_^;)

拳と木刀で語り合ったのなら、そりゃあ距離も縮まります（o^ -
'）b

あつ、ちなみにラストに出てきた又コミメイドとかフリフリ魔法少女とか、あるいは今アキちゃんが着てるブレザー&ミニスカートは、全て束と怜お手製でISスーツとしての機能は持つてるって裏設定が：（；^ | ^ A

いよいよ次回は明久の腕前披露（これ言ったの何回目だろ？）ッス
ますますカオスになってきそうな予感はしますが、宜しければ次回
もお願いしますm（ | | ） m

それでは、また次回お会いできる事を祈りつつ（ | | ）

【Episode00】第6話 "使用機体のパラメータって、チ

皆様、こんばんわー

いつも俺には時間が足りないと思ってる暮灘です(^^);

さて、ちよいと圧してるので今回は短めに…

今回のエピソードは、前半と後半の作風がかなり異なります(^^);

前半 明久のISスキルの一部が明らかになる(ミズキの姿が判明)

後半 おバカです(^^;)

え〜と…【凛々しい一夏】をご期待の皆様、ごめんなさい(――)

でも、【健全で健康的な男子中学生丸出しの一夏】は、作者はわりと好きだったりして(^^;)

こんなエピソードですが、お楽しみいただければ幸いです(o^-
)b

明久がブレザー&チエツクのミニスカのままISに乗り込む…いや、装着すると言った方が正しいのか？
ともかく、そんな状態になった明久だが…

「ミズキ、ISコア・イグニッション。オール・システム、エンゲージ&コンタクト。コントロール・イン・ユア・アイズ」

《”ミズキ。ISコアに火を入れて。全システムに回線接続、相互情報伝達開始。全てのコントロールを君が把握できるようにしておいて”》

そんな趣旨のコマンドを明久が口頭で告げると、

『びよ〜ん』

外からは見えない、網膜直接投影型スクリーンの視界の中に、何と
いうか…

ウサミミ&綿飴みたいなピンクのふわふわ髪、ついでにきよぬー（
本人？談）らしいが、SDキャラの為にわかりづらいキャラクター・

アイコン…

いや、何となく東とキャラがかぶってるようなマスコット・キャラ…

もっと分かりやすく言えば…

ぶつちやけ、【バカとテストと召喚獣ぢや】に出てくる”姫 料理の妖精（笑）”に、姿も（微妙に性格も）まんまな【ミズキ（視覚化ver）】が現れて、

『ラジャー オールISシステム、アンダー・コントロール・オブ・マイン 』

《”りょーかいですよ 全てのISシステム、ワタシの管制下に置いてしまいました”》

ミズキからのシステム掌握の確認が入ると明久は、

「じゃあミズキ、データのダウンロードをお願い…って、何これっ！？ このIS、全く初期設定のまんまだよ」

『はわわ〜。見事なまでの【ヴァージンIS】ですね〜 』

「秀ちゃんもいつくんも、よくこんな設定で乗ったなあ〜。しかも、ブレオン（ブレード・オンリーの略）”だし…いくら【イージー・モード】でも、これでブリテン倒してチャイナに引き分けた秀ちゃんって、凄いかも…」

『秀ちゃんなら、もしかしたらアキちゃんと同じ【2ndセッション】を乗りこなすかもしれませんね〜 あっ、いつそ【トリニテ

「イ・ラビット」のデータをダウンロードしますかあ？」

ミズキが放つ単語にはは、明らかに現役IS技術者でも意味が分からない物が含まれていたが、もしもこのシリーズが続くなら、やがて語られる…かもしれない。

「ん、でもせっかくだから”この子”の性能も試してみたいし…ん？」

(おかしいよね…?)

ふと、明久は流れて行くISのデータの中に紛れた違和感に気が付いた。

普通ならよほどしっかり観察と解析せねば気付かぬそれに気付けたのは、やはり開発サイド…それも世界最高のIS権威のすぐそばにいたからだろう。

「ミズキ、もう一度この子のコア・データ、見せてもらえる？」

『はいはい』

そして、流れ終わったデータを見て、明久はある結論に辿り着いた。

「これ、ボディは新品で初期設定のままだけ…」

『はい。装備が酷似していたので、最初は気付きませんでした。が…
コアは間違いなく、』

ミズキの言葉に明久は頷き、

「歴戦の強者だよ…それも、全てのISでトップクラスの、ね」

『凄いですね〜 プレイ（稼働）時間なら、ワタシを除けばほぼ
IS最長じゃないですか？ 蓄積データも質がいいです〜 』

「よっぽどいいプレイヤーが使ってたんだろ〜な〜 一度、対
戦したいや」

『クスクス アキちゃん、なんだか子供みたいです〜 』

「？ ボク、まだ子供のつもりだけど？」

『そうでしたねえ〜 』

何やら妙に楽しそうなミズキを不思議に思いながら明久は、

「ねえ、ミズキ…この子、コアの実戦データをフィードバックして、
フィッティングしちゃおうか？」

『ぐっどあいであ〜 幸いこのコアが入ってた前の子も、同じよ
うな特性みたいですから、楽勝ですよ〜 』

「おっけー じゃあ、始めよっか」

少し時間を巻き戻しつつ、少し視点を変えてみよう。

「一夏よ…確かに明久のスカートが一部捲れ、パンチラどころかパンモロじゃ…」

「…青と白のストライプ…しかもウサギの1ポイント…ハアハア」

まあ、それは束縛製を意味するのではあるが…

勿論、そんな事を気付く一夏でもなければ、例え気付いたとしても今の一夏には、些細な問題だろう。

「この様子じゃと、明久も自分の姿は見えておるまい…」

秀吉の推察通り、明久はゲーム（今は設定）に集中する為、視覚や聴覚などの外部モニター系のセンサーは、全て回線を切っていた。

そして秀吉は、視線を前方斜め下に向け、

「しかしのうち…至近距離で座り込み、かぶり付きでガン見するのは、いくらワシでもどうかと思うんじゃないか？」

（真実を知ったら、かなりのダメージを受けそうじゃな…いや、）

秀吉は少し考え

（むしろ開き直り、”新たな世界（笑）”に一步踏み込むやもしれぬな…）

それを想像すると、少し楽しくなってしまう秀吉であった。

それにしても、何故こうまでガン見されてバレないのか？

勿論、束謹製の”アキちゃん専用特殊下着”の影響だ。

具体的な表現は避けるが…

取り敢えず、フルオーダー・メイドで作られたそれは、特殊な光学迷彩があるいは量子工学的な何かは不明ながら、無駄にISのコアに匹敵するハイテクが使われており、何というか…

【男の分身、息子、魂】的な何かを全く目立たなくさせるのだっ！！

ちなみにブラには、薄くて小さなパットが入っているのだが、そのパットの中身はただのシリコンではなく、ぱんつの【欺瞞システム（笑）】にエネルギーを供給するシステム（表面体温をエネルギーに変換してるらしい。だから付けるとヒンヤリする）になっており、必ず上下セットで装着するよう、束と怜に（お小遣いを盾にとられ）厳命されていた。

まあ、他にも生体電流を応用した「ホルモンバランス精密調整システム」のような物も搭載されてる噂はあるが…（汗）

まあ、束のチート技術以外にも、明久は13歳の時に召喚（笑）され、思春期（第二次性徴期）のど真ん中に、ウサギと実の姉の手（悪巧み）により成長を抑制&調整が施され、少年から男へと成長する時期に身心共に…

【男の娘】

として完成してしまった事も、大きく影響してるだろう…

しかし、明久は「年頃の女の子のような羞恥心」を何気ない洗脳（笑）で植え付けられたにも関わらず、決して与えられなかった物がある…

それは、

【ぱんつを短いスカートでガードする方法】

だっ！！

だから、明久はかなり（性的に）危険なレベルで無防備なのだ。

一夏は、秀吉の手前からかまだよく耐えてる方だと言えよう。

実は、明久の無防備さについては責任者にコメントが取れてるので、蛇足ながら公開しておこう。

メタウサ（メタル・ウサミミ）

『だってパンチラって萌えるじゃん』

永遠の17歳

『ぱんつを見られたと理解した時の、あの恥ずかしそうな顔がまた萌え萌えです』

君らって一体…
いや、取り敢えずグツジヨブと言うべきか？

少なくとも一夏的にはそうだろう。

「うおおおおーっ！！ 抜きてえーっ！！ ついでにかけて
えーっ！！！」

秀ちゃんは心底呆れながらいつくんを見て、

「あえて、”何を？”もしくは”どこに？”とは聞かぬが…お主、
人としてかなりギリギリのラインに立っておるぞ？」

「フツ…やりたい盛りの男子中学生なんて一皮剥けばこんなもんさ」
と、手の平で額を押さえてニヒルに笑う…通称”ルル（ゼロ）のポ
ーズ”をキメる一夏に、

「格好つけてるとこ悪いがのう…それを言うなら、”一皮剥けば”
じゃ」

「失礼な！ 俺は既にムケているっ！！！」

織斑一夏…

やはり、ストレートな意味で【バカ】であった…

部屋に白衣を着た研究員達が部屋に駆け込んできたのは、ちょうどその時だった…

【Episode 00】第6話 "使用機体のパラメータって、チ

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

編集可能文字数と時間の都合で、明久の操縦スキルは次回になってしまい、読者様の反応が怖い暮灘です(^^; ;

ま、まあ明久のISSスキル(+知識)は公開できたので、ご容赦を(^ _ ^ ;)

今回は一夏くんが剥き出しの発言をとりましたが、束&怜の天才最強コンビ込みで如何だったでしょう？(; ^ _ ^ A

さて、いよいよ短期集中連載も終盤に近づいてきました(えっ!?)

可能な限り早いタイミングで、またお会いできる事を祈りつつ(_)

【Episode 00】第7話 "・IBにしては珍しくシリアス…で

皆様、おはようございます

ここ最近、時間を問わずに迷惑メールが飛んできて、しかもそのタ
イミングが【メール投稿不可】の症状が出た最初の日と完全に一致
してる為、かなり運営サイドの情報漏洩を疑ってる暮灘です(^^;;
って長えよ！

でも、事実なんですよね(汗)

さて、今回のエピソードは…

なんというか…サブタイ通りに全編、明久とミズキの最強コンビ
？)の、ISスキルが炸裂します。

というか、明久はIS学園に通う意味あるんでしょうか？ 制作サ
イドなのに…(^^;;)

強いて言うなら、シミュレータじゃなくリアルでの戦闘経験の獲得
かな？

作品的にはフラグ立てとか？(笑)

取り敢えず、明久+ミズキの【力の一部】が出てくるエピソードで

すが、お楽しみいただければ幸いです（o^_^）b

時間はまた少し遡り…

再び、明久&ミズキ・コンビ(?)

「ねえ、ミズキ…この子、コアの実戦データをフィードバックして、フィッティングしちゃうおうか?」

『ぐつどあいであゝ 幸いこのコアが入ってた前の子も、同じような特性みたいですから、楽勝ですよゝ』

「おっけー じゃあ、始めよっか」

と、一人と一体が、やけに楽しげに作業を開始する。

「それにしても…エネルギー関係にやたら欠陥が目立つなあゝ。単ワンオフ・アビリティイ一仕様の”零落白夜”はある意味チートだけど、燃費悪すぎ(汗)」

と、思わず苦笑いする明久に、

『アキちゃん、どうします? いっそ、ワタシのデータを書き加えて【第二形態】に強制移行させちゃいますかあ? これだけ燃費が悪くてブレオンだと、選択できる戦術オプションの幅が狭すぎます

よお?』

ミズキの提案に明久は少し考え、

「うーん…止めておくよ。ボクのアキちゃんなら構わないけど、コアの設定を見る限りまだ”ユーザー登録”が未確定だし…
【セカンド・ステージ】にまで移行させちゃうと元の設定に戻すのメンドイし…!」

そして、ニコリと微笑み、

「ブレオンは、”漢の浪漫”って言うしねっ」

『“漢の浪漫”ですかあ? アキちゃんには一番似合わない単語ですなえ〜』

「ミズキ酷いやっ!」

何やら心和む会話ではあるが、一つ明久の発言に注目して欲しい。

彼（彼女?）は、こう発言していた。

『第二形態まで移行すると、元の設定に戻すのメンドイし…!』
と。

そつ…面倒なだけで、一言も『できない』とは言っていないのだ。

コレが、“今の明久”の広い意味での【力】だった。

「じゃあ、どう設定しますかあ？」

「ワンオフ・アビリティー【零落白夜】の発動条件/設定を任意変更。未使用時は即時ホットのスタンバイ・モードに設定。能力発動までのシーケンスは、N007〜112までをクラスター・プログラム化。N0225〜289をアーカイブ化。他の連動プログラムとのマッチングを、ランダム・パラレル・アクセス（RPA：随時並列処理）開始から発動までを最適/最速化。発動タイミングは、対象エネルギーへの衝突1/10秒前を絶対臨界ラインに設定。スイッチは、パイロットの脳量子波を優先。ただし、センサーに任意設定する以上の強度数値のバリア強度が確認された場合は、強制発動」

『はいはい』

明久から提示される複雑なパラメータ変更をいとも容易く…まるで鼻歌でも歌うように、処理していくミズキ。

普段の言動からは信じられないが、実はかなりの高性能ユニットらしい。

いや、少し違うか？

【次世代騎（2ndセッション）】の雛形となるべく試作された明久の専用IS【トリニティ・ラビット】…

その、《インテリジェンス・サポート・ユニット兼サブ・パイロット》、【名実共のパートナー】として製造されたミズキにとっては、この程度の作業は、比喻でなく朝飯前なのだろう…

『固有兵装の”雪片式型”の設定はどうします？ どちらから自在可変装備：“展開装甲”の試作型が使用されてるみたいですねえ』

「…ねえ、ミズキ」

『はい？』

「もしかしたら、この子…えくと、【白式】って言うらしいけど、開発に…東ちゃんが関わってるんじゃないかな？」

『展開装甲を使ってるからですかあ？』

展開装甲：技術的には、現在世界各国が躍起になって開発している【第三世代IS】の更にその先にあるテクノロジー…
言うならば、まだコンセプトすら固まっていな【第四世代IS】に採用されるかもしれない飛び抜けた最先端技術だった。

勿論、こんなチート系変態技術をもってるのは、世界で篠ノ之東ただ一人であろう。

「いや、それもあるけどさ…なんていうか、雪片式型の元ネタって、絶対に”ムラマサ・ブラスタ”って気がするんだ…」

「ムラマサ・ブラスター」

長谷川裕一著【クロスボーン・ガンダム】に登場する主人公機、”クロスボーン・ガンダムX3”専用のバスターソード型の主力武器。

巨大な実体剣にビーム発生器を14基（一説によれば15基）内蔵した装備で、全ての発生器を共振させ発生させた巨大な”収束ビーム刃”は、エフィールドごと敵を切り裂く能力を持っている。

また、エネルギーに指向性を持たせ加速させる事により、並のビーム・ライフルより凶悪な威力のブラスター・ガン（射撃武器）としても使用できた。

「しかも、【レヴァンティン・モード】とかあるし…これって、間違いなく連結刃とか蛇腹剣ってオチだよなっ!? このどこまでも中二病臭が漂う3モード設定って…」

複雑な表情の明久に、ミズキは能天気な顔で、

「まあまあ 実体剣で至近距離、ビーム刃で近距離、連結刃で中距離、ブラスター・ガンで遠距離に対応してるって考えれば、それなりに合理的ですよぉ」

「それを一纏めにするメリットは？ レンジに応じて武器を一つ持ち変える手間は、確かに省けるけど…」

明久は真剣に考えながら、

「手数が増える訳じゃないし、同時にも使えないから、結局は【フ

ル・レンジに対応してるブレオン】ってだけなんだけど…そりゃ、近接オンリーよりはマシだけどさ」

『もしアーク・マスター（製造者）が関わっていたのなら、きっと技術の根本は中二魂にあるのよ』とかつて理由だと思えますよあ？』

ミズキの的確過ぎる言葉に、つい明久は『よろくん』という顔になり、

「ミズキ…それ、スツゴく有り得そう」

ミズキはにぱあ〜っ　と笑い、

『ここは一つ、【戦闘用】ではなく、【決闘用】ISだって割り切っちゃいましょう』

「それしかないかあ〜」

さて、それは明久が雪片の展開装甲の設定をイジろうとした時のこと…

《ここから先の設定はは、マスター権限が必要です。マスターキー・コードを入力してください》

と、網膜ディスプレイに表示された文字情報に、明久は面倒臭そうな表情で、

「入力モードは、音声認識。【Welcome to this crazy time このイカれた時代へようこそ】」

《パスワード、コレクト。ようこそ、”ゲーム・マスター”。機密保持の為に全ての外部情報を遮断。”D-ダナン型防壁”を展開します。以後、ゲーム・マスターの許可があるまで、一切の外部からの干渉は切断します》

明久は内心で「念入りだなあ」と思いながら、

「防壁の設定を一部変更。機密指定情報に抵触しない最低限のモニタリング情報は、継続して開示。ただし、外部からの干渉遮断設定は変更なし」

要するに、こつちから秘密に引つ掛からない情報は流してやるから、外からイジるなという意味だ。

白式のコアに内蔵されてる管制プログラムは、

《了解》

とだけ返した。

突然、情報を一方的に流すだけで、一切のこちらからの制御信号や操作を受け付けなくなった白式に、【管制ルーム】が大騒ぎになったのは、この時だった…

【男である筈の一夏に、なぜ女しか乗れない筈のISが反応したのか？】

技術的には興味深く、政治的には重苦しいこの問題を真剣に討議してた技術者や科学者、責任者達に、一夏とは違う意味の【異常事態】が飛び込んできた。

ちなみに、一夏より一つ前に白式に乗った筈の秀吉が問題なしとされたのは、白式のセンサーが秀吉を【女性】と”誤認”したからだ。

現場の担当官から、管制ルームの一番偉い人まで、全員が「随分と男の子っぽい名前の女の子だな…」と思っただけで、等しく誤認してたから、この時点では誰もミス…

実は、【一夏は二人目の男性IS操縦者】だという事実気づいて無かったのだっ!!

もともと、彼らだけを責める事は出来ない…

そもそも、書類選考段階で、書類担当者が誤記入だと思い、性別欄を【女】と修正していたのだから…

科学者達が駆け付けた時、白式の内部では…

明久 side -

「スラスタ開度、角速度、推力、白式のコアデータを参照に最適化。空力データや重力偏差、コリオリ・モーメントもデータ修正。慣性中和装置は随時連続可変に設定。可変参照データは、ボクの生

体情報モニタリングをメインに」

『らじゃあー』

これで少しは燃費が良くなる筈だよな？

(あっ、そうだ！)

ついでに…

「ミズキ、外部装甲や内蔵フレームの非応力過負荷部位を性質変更して、”キャパシタ属性”を付与できる？」

『簡単ですよ』　ワタシにお任せですすう』

ミズキ、性格はアレだけど、腕は確かだからね

そして、全ての事前設定が終わって…

「じゃあ、ミズキ…ゲームを始めよっか？」

『はあ〜い　アキちゃん、モードはあ〜』

決まってるよ

「コード入力…【”Fortis931”
理由をここに証明する】」

我が名が最強である

《パスワード認識。ISシミュレータ、”シークレット・モード”
で起動。【エクストラ・ハード・パーティー】をプラグイン。ゲー
ム・スタート》

『れつつ・ぱぐりい〜ですう』

「目指せハイスコアだよ」

明久とミズキが魅せた光景…

それは誰しも目を疑う物だった…！！

【Episode00】第7話 "IBにしては珍しくシリアス…で

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

前回の後書きにもチラリと書きましたが…

一応、【Episode00】を書き終わると更新を一度停止して、他の作品の連載に戻るなり、頭の中のアイデアをまとめてサンプル書こうかな〜と思ってます(^^;) ;

多分、【Episode00】は次回か次々回で終わり…エクストラ・ステージまで入れても3回くらいで収まると思いますが、最後までお付き合い頂ければ幸いです(o^_^)(b

それでは、また次回お会いできる事を祈りつつ(____)

【Episode00】第8話 "明久「魅せてあげる…圧倒的な力

皆様、おはようございます

本日は徹夜で書いて寝る前に投稿って感じの暮灘です(^^);

【Episode00】も、いよいよラスト・ステージに近づいて
きましたが、今回のエピソードは…

ひたすらバトル(笑)でしょうか?(^^);

そして、再びいっくんが己に正直な発言で輝きます(o^-')b

そして、何気にアチコチに出てくる下らないのから凄いのまで、
【束、驚異のテクノロジー】の断片…(^^);

取り敢えず、こんなエピソードですが、楽しんで頂ければ幸いです
(o^-')b

「うおっ！？ 何が起こってるっ！？」

ISルームに雪崩をうって入ってきた科学者や技術者達が最初に驚いたのは、突然変形を始めた【白式】の専用武装【雪片式型】だった。

【展開装甲】という概念を、束がまだ世に出してない今、機体ではなく武装とはいえ、より巨大に禍々しく姿を変えたソードは、かなりセンサーショナルな光景だったに違いない。

しかし…

彼らが真に驚くのは、まだ早かった…

特殊なプロテクトがかかっており、束一派しか解除方法どころか、その存在すら知らなかったISシミュレーションの【エクストラ・ハード・パーティー】モード…

その中身は、まさに外道であると同時に、厨二魂を擽る仕様であった！！

スパロボ系プル&プルツィを彷彿させるブルティアと2号機”サイレント・ゼフィルス”のツイン・オールレンジ合体攻撃を突破した

と思えば、待ち構えるのは三國志の英雄を準えたような3騎の中華系格闘ISの連携攻撃っ！！

オールレンジ弾幕射撃と連携格闘という熱々の展開を退けたと思ったら、やたら強い【無人IS】のステージに、無人ISの動きを見計らうように少しづつバリア強度を削ろうと波状攻撃をかけてくるフレンチ騎！

しかも、その距離を問わない攻撃に誘導されたように、進路先に待ち構えていたのが【ウサギマーク】をつけた黒いゲルマンISの一団！

また、「黒のカラーリングは伊達じゃない！」とばかりに、雑魚騎じゃありえない集団機動連携戦術：【三次元空間向けに練り直したジェット・ストリーム・アタック】を仕掛けてくるっ！！

そして、明久とミズキはその全てを…

『うりゃうりゃうりゃうりゃっ！ですう〜』

「飛竜一閃…！！」

避け、凌ぎ、捌き、逆襲し、叩き落としていた！

（一番燃費が良いのは実体剣、ビーム刃は威力は抜群だけど高威力、連結刃は中射程までカバー出来る使い勝手の良さがあるけど…）

「一度射出すると完全に引き戻して再連結しなければ、剣として使

う事は不能…！」

引き寄せる時にも鞭のような刃を1騎のISSに巻き付け、シールドを0にし撃墜する。

(ブラスター・ガンは思ったより射程は長いし、発射速度も悪くないけど一撃でISSをシールドごと破壊できる威力はない…)

何より射撃武器：白式より切り離されるので、シールド破壊の零落
白夜は機能しない。

(武器の一つ一つに別々の特性があるのは良いけど…)

「やっぱり併用できないのは、少しやり辛いなあ」

大画面プロジェクターに投影され、ISSルームにいる全員がその画像に見入り、そして一人と一体が繰り広げる、美しくも苛烈な”舞い”に魅了されていた…

ごく一部の例外を除いてだが…

「うおおおーっ！　今すぐ脱がしてブチ込みてえーっ！
！」

どうやら一夏が魅了されてるのは、全く別の代物らしい。

いや、勿論かぶり付きでガン見を続行してるのは、明久の一部が捲れあがり、チラツではなくモロ気味に見えてる青と白のストライプが眩しい縞パンなのだが。

人間というのは運動をすれば、当然汗をかく。

明久も例外ではなく、いくらゲームとはいえあれだけ激しくプレイをすれば発汗もする。

そこで、冷静に考えて欲しい。

もし、明久が履いてるぱんつが市販品同様に”ただの布切れ”であれば、その…男のシンボリックな何かがマリモッコリと浮き上がってしまうのだが…

しかし一度情熱を掛ければ、そんな半端仕事をしないのが篠ノ之束という人物だ。

ウサギのワンポイントがトレード・マークの【束謹製アキちゃん専用下着セット・ボトムパンツ（ぱんつ）】は、明久の発汗を感知するとそれを吸引すると同時に外からの見掛けを…

【女の子が濡れた状態】

を精密にイミュレートし、再現する。

具体的には、うっすらと透けるといっつか、スジが浮いてくるというか…

まあ、エロゲー好きな読者諸兄にはお馴染みの、【モザイクがかかる一歩手前のシーン】と言っておこう。

まあ、そんな訳でいっくんが暴走するのは無理の無い所ではあるのだが…

しかし、秀ちゃんは最早呆れるというより、明らかに体温を感じない視線で…

「一夏よ…正直なこと、自分に正直で有ることは確かに美德じゃとワシもおもっぞい。あえて何を脱がし、何を何処に突っ込むかは聞かぬ。じゃが…」

秀吉は、更に視線の温度を下げて、

「万が一にも実働させてみよ…ヌシとの友情は一撃死、縁もこれま
でじゃぞ？」

(それにしても…)

秀吉は、視線を漢臭と獣臭を漂わせる一夏からプロジェクターに移
し、

「明久よ…お主、この三年間にどれほどの【修羅】になりおったの
じゃ…？」

役者であり、舞台の上ではいつでも真剣勝負な秀吉には、どうして
も分かってしまうのだ…

明久とミズキの【舞い】が、明らかに”ただのテスト・プレイヤー
”として培われてそれとは異質…いや、別次元のそれであることに。

(まるで、実戦武術の真剣勝負でも見てる気分じゃわい…)

秀吉の背筋にゾワリとした感触が走った…

一方、自分が盛大にパンチラ…もとい。パンモロしてる事に気付いてない明久はと言えば…

「ハアアアア…ッ!!」

”ザンッ!”

ユニコーン・ガンダムばりに”変身”したゲルマンのボス騎を、
イグニッション・ブースト
”瞬時加速”+零落白夜のコンボで倒したところだった。

「ミズキ…ハア…あとエネルギー残量は…あふっ…」

『あと180ってとこですね…それにしてもアキちゃん、今の呼吸は色っぽかったですよ〜』

何処までもブレないミズキに、

「あはは　ミズキは余裕だね？」

『そりゃそうですね。だって細かい出力や推力調整、慣性パラメータの微調整に照準の自動追尾とかしかやることないので！ワタシ、ちよっとブンブンなんですよ〜！』

明久はクスツと笑い、

「白式は展開装甲を使っているって言うても【1stセッション】の機体だからね。ミズキみたいに多機能高性能なサポートAIの搭載は前提にされてないんだよ」

『アキちゃんに誉められるのは嬉しいですけどあ…やっぱり、ワタシの真価を発揮するのは、【FFD】や【マルチモードNGフィールド】…そもそも、【NGドライブ-T】が必要な事を思い知らされちゃいましたあ〜』

ミズキの語る謎の単語…

その何処かで聞いた響きの単語ではあるが、その謎は何れ明かされる…かもしれない。

ただ、明久の愛騎に使われているらしいそれは、世界のどのISにも使われておらず、また会話から察するに展開装甲よりも更に新しい技術と思われる…

「でも、借り物のISでここまでこれたのはミズキのおかげだよ」

ミズキは本当に嬉しそうに、

『じゃ〜ん　そう言ってもらえると、頬が緩んじやいますよあ〜』

』

と、一頻り喜んだ後、

『でもアキちゃん…エネルギー残量から考えて、恐らく次の【銀の福音】シルバー・ゴスペルがラストバトルになるかと思えますよお？ 残念ですけどお

…』

「わかってる…だから、最後はエネルギー限界まで派手にやろう」

『らじゃー れつつ・ぱーりいですう』

明久とミズキの擬似的な戦いは、どうやら最終局面を迎えつつあるようだった。

【Episode00】第8話 "・明久「魅せてあげる…圧倒的な力

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

お待たせしたバトルシーンは、実は【Episode01】以降の見せ場も考え、わりとはしより気味だったりしますが、それなり程度には迫力が出るといいな〜と、少し不安な暮灘です(^^);

さて、これで【Episode00】のメインフレームは大体終わり、いよいよラストに雪崩れて行きます(o^_^)(b

次回は多分、ラストスパート

最後までお付き合い頂ければ幸いです(____)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1514y/>

I B -インフィニット・バカトリオ- [無限の3バカ烈伝]

2011年11月7日08時13分発行